

# 大学生活と経済状況との関連についての研究（第1報）

仕送り，アルバイト，奨学金と自尊感情，レジリエンスに着目して

A Study on the Relation between University Life and Economic Situation

(1st Report)

Focusing on Funding, Part-time Job, Scholarship and Self-Esteem, Resilience

飯 田 昭 人

Akihito IIDA

## 要 旨

本研究の目的は、大学生を対象に質問紙調査を実施することで、大学生活と経済状況との関連を、仕送り，アルバイト，奨学金と自尊感情，レジリエンスに着目して明らかにすることである。

本研究からは、①大学生の経済状況が厳しい現状であることと、②経済的な困り感と自尊感情との間には少なからず関連があるということ、また経済的に困窮していると認識している群（経済的困り感高群）のほうが、経済的に困窮していると認識していない群（経済的困り感低群）よりも、自尊感情得点およびレジリエンス得点が有意に低いことを明らかにした。

単純に、経済状況の悪化のみが問題とされるのではなく、経済状況の悪化による本人自身の経済的困窮の受け止めを深刻化しすぎないで済むような社会環境の醸成が求められると考える。

## I. 問題と目的

内閣府（2017）主催の第4回子供の貧困対策に関する有識者会議における「子供の貧困対策指標」には、生活保護世帯，児童養護施設，ひとり親家庭の大学進学率が掲載されている。2016年における生活保護世帯の子どもの大学進学率（短期大学，専修学校含む）は33.1%，児童養護施設の子どもの

24.0%，ひとり親世帯（2011年のデータ）については41.6%となっている。ちなみに全世帯の進学率は，73.2%である。大学または短期大学に限っていうと，生活保護世帯は19.0%，児童養護施設の子どものは12.4%，ひとり親世帯は23.9%（2011年のデータ），全世帯は52.1%という数字になっている。「進学格差」が明らかに存在しているといえるだろう。また，10年以上大学に勤めている筆者の印

象を述べると、相当数の学生たちは、大学に入学してからも日々の生活のために、奨学金を頼ったりアルバイトを多く行ったり、もしくはその両方に関与していることが多い。これらの学生たちについては、講義の欠席や心身の不調といったさまざまな影響が懸念される。

一般的に「アルバイトは良い社会経験になる」という言説は、確かにその側面はあるものの、稼働状況が劣悪でなかなかアルバイトを休むことが出来ないということを学生たちの話からよく耳にする。また、1ヶ月に10万円近くの有利子奨学金を借りている学生が「卒業後、700万円近くの奨学金を返すことができるだろうか」という不安を口にする場面に出会うことが多々ある。このようなエピソードからは、学生の経済状況が大学生活におよぼす影響は想像に難くない。

末富（2017）は、子どもの貧困における課題における「長期包括支援型」学校プラットフォームの拡充のための施策として、「大学段階では、低所得世帯への給付型奨学金や授業料免除の拡大だけでなく、高校段階までと同様にソーシャルワーカー（キャンパスソーシャルワーカー）によって困難を抱える学生の『自立』を支援する仕組みの整備も重要である」と指摘し、続けて「貧困世帯に育つ学

生の課題は、複合的であり、カウンセラーだけではなく、ソーシャルワーカーも関わった外部機関への連携も必要となる場面がある」とし、最後に「一人ひとりの学生が就労へと移行できるように大学によるきめ細やかなキャリアサポートも、大学での取組みが進みつつある分野であり、いっそうの充実が期待される」と結んでいる。

この末富（2017）の指摘における「(大学生の) 困難」や「複合的な課題」について着目し、本研究では、大学生の経済状況が大学生活にどう影響を及ぼすのかを検討していくことを目的とする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査協力者

北海道内の2大学の学生299名を分析対象とした。対象者の性別、年齢、学年、居住形態の内訳はFigure 1, 2, 3, 4のとおりである。

### 2. 手続き・調査内容

#### 2-1 手続き

講義中に質問紙調査を配布、実施した。研究の趣旨を説明し、同意の得られた学生を対象とした。

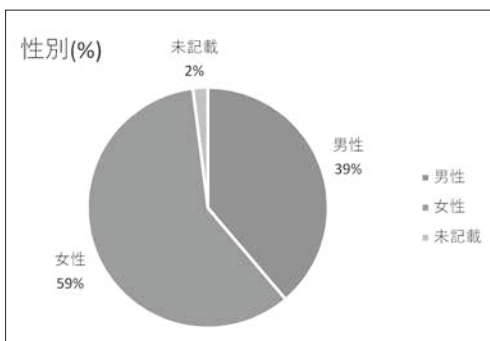


Figure 1 性別

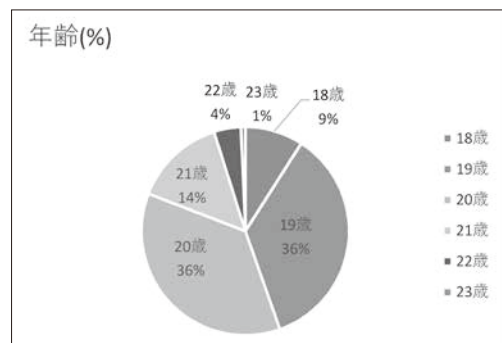


Figure 2 年齢

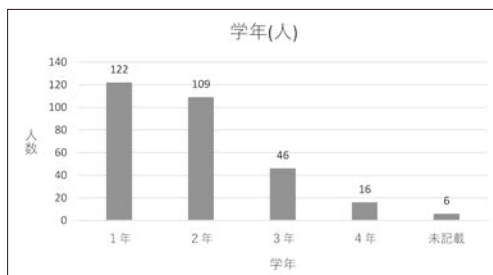


Figure 3 学年

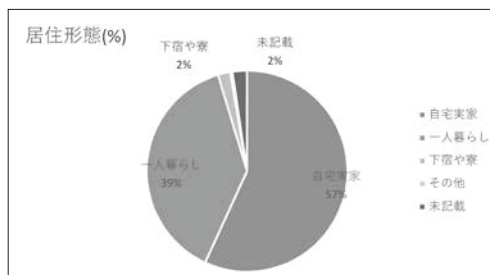


Figure 4 居住形態

## 2-2 調査内容

### 2-2-1 対象者の基本属性

対象者の性別、年齢、学年、居住形態。

### 2-2-2 大学生生活の状況

吉中 (2016) を参考に、1ヶ月の収入状況 (仕送り、アルバイト、奨学金、その他)。アルバイトの内容や使い道など。奨学金の使い道や返済予定について。

### 2-2-3 対象者自身に関すること

対象者自身の捉える経済状況、経済的困り感。Rosenberg (1965) の自尊感情尺度10項目うちの5項目を採用した、自尊感情尺度短縮版 (5項目)。平野 (2010) の二次元レジリエンス要因尺度21項目のうちの7項目を採用した、レジリエンス尺度短縮版 (7項目)。

## Ⅲ. 結果

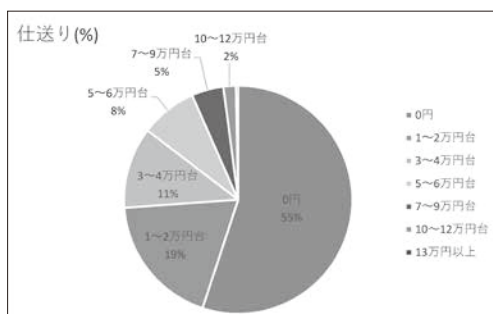


Figure 5 仕送り (小遣いを含む)

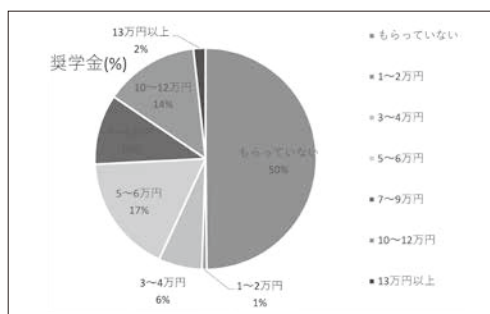


Figure 6 奨学金

## 1. 大学生生活の状況について

### 1-1 1ヶ月の収入状況について

まず、親からの仕送りや小遣い (Figure 5) については、「0円」が55%、「1~2万円台」が19%、「3~4万円台」が11%の順で続く。ちなみに、住居形態について「一人暮らし (アパート、マンション)」と「下宿や寮」のいわゆる実家外の学生121名中、「0円」が34名 (28%)、「1~2万円台」が20名 (17%)、「3~4万円台」が27名 (22%) の順であった。すなわち、対象学生の半数以上が仕送りや小遣いをもらっておらず、実家外から通っている学生においても30%弱の学生が仕送り等もらっていないことがわかった。

次に、奨学金 (Figure 6) については、「もらっていない」が50%、「5~6万円台」が17%、「10~12万円台」が14%、「7~9万円台」が10%の順であった。ちなみに、実家

から通っている学生79名(46%)、実家外から通っている学生62名(51%)が奨学金をもらっていないという結果となった。

続けて、アルバイト収入(Figure 7)については、「現在していない・0円」が24%、「3~4万円台」と「5~6万円台」が20%、「7~8万円台」が19%の順であった。ちなみに、実家から通っている学生28名(16%)、実家外から通っている学生42名(35%)が、アルバイトをしていない、0円収入という結果となった。

### 1-2 アルバイトに関する ことについて

アルバイト経験(Figure 8)については、「現在している」が212名(73%)、「今はしていないが、大学生になってしたことはある」が52名(18%)の順であった。

アルバイト収入の使い道(Figure 9)については、「一番目の使い道」「二番目の使い道」「三番目の使い道」と尋ねており、総じて「娯楽費」「交際費」「生活費」などに使用

していることがわかった。

### 1-3 奨学金に関する ことについて

奨学金の利用(Figure 10)については、「大学生になって初めて借りている」が145名(49%)、「今まで借りていない」が130名(46%)、「高校生ときも借りており、大学生になっても借りている」が8名(3%)の順であった。

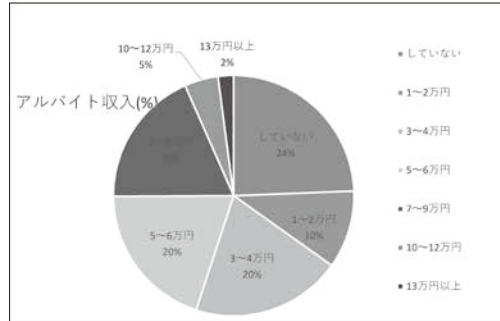


Figure 7 アルバイト収入

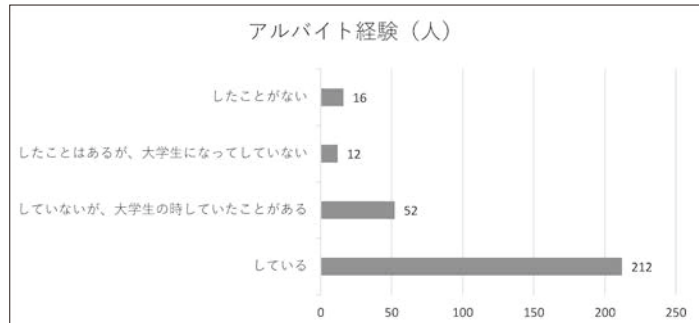


Figure 8 アルバイト経験

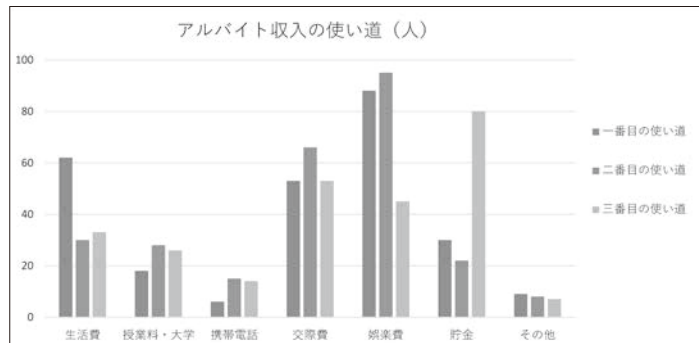


Figure 9 アルバイト収入の使い道

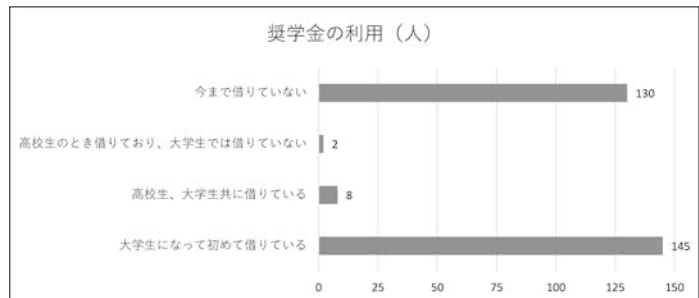


Figure 10 奨学金の利用

奨学金を借りている学生のうち、奨学金の利用を決めたきっかけ(Figure 11)につ

いては、「親から奨学金を借りるように言われた」が110名(73%)、「自分で決めた」が31名(20%)、「高校の先生から進学の手段として借りることをすすめられた」が10名(7%)の順であった。

大学での奨学金を利用するときに、相談した主な人は誰か(Figure 12)については、「親や家族」が125名(90%)、「高校の先生や高校の関係者」と「誰にも相談しなかった」がそれぞれ7名(5%)の順であった。

自分の手元で受け取った奨学金の残金(Figure 13)については、「親が管理しているので、親に任せている」が59名(41%)、「急な出来事のために残している」が25名(17%)、「実家に送っている、または実家で使っている」が16名(11%)の順であった。

奨学金をどのように返済しようと考えているか(Figure 14)については、「自分で全額返済予定」が118名(80%)、「自分と親・家族で分割して返済予定」が24名(16%)の順であった。

奨学金を返済することについてどう思っているか(Figure 15)については、「とても不安である」が56名(38

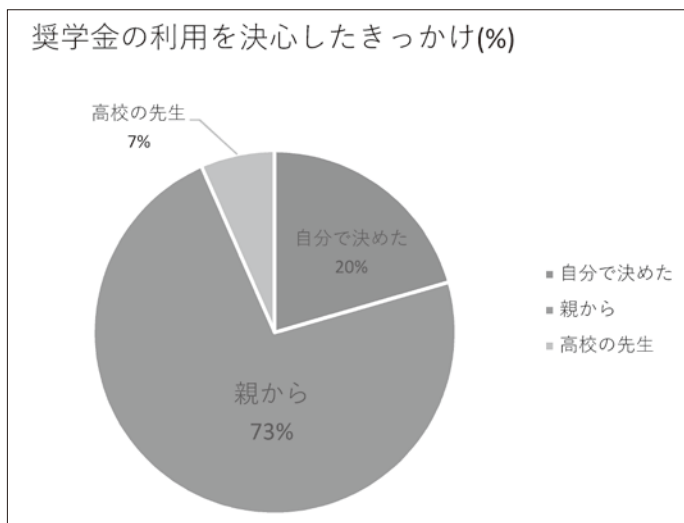


Figure 11 奨学金の利用を決心したきっかけ

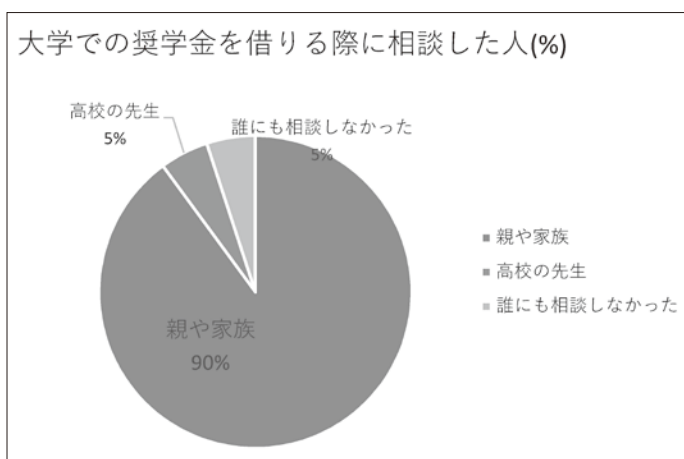


Figure 12 大学での奨学金を借りる際に相談した人

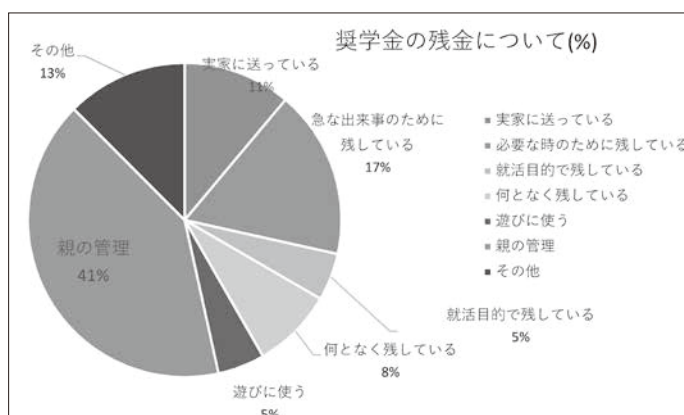


Figure 13 奨学金の残金について

%),「不安である」が50名(34%),「どちらともいえない」が28名(18%),「不安ではない」「全く不安ではない」がそれぞれ7名(5%)の順であった。「とても不安」と「不安」と回答した学生は全体の72%であった。

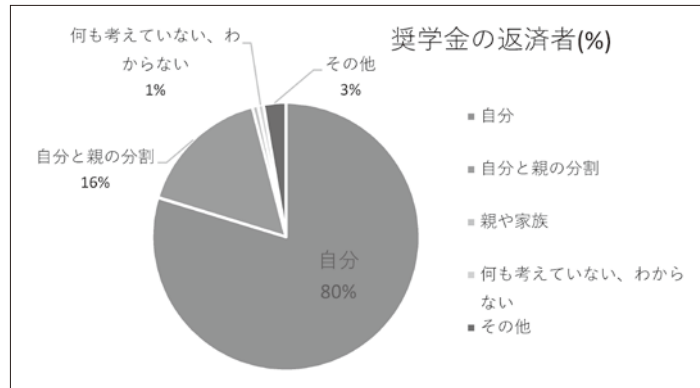


Figure 14 奨学金の返済者

## 2. 対象者の捉える暮らしの状況, 経済的な困り感について

### 2-1 暮らしの状況について

経済的に(お金に関して)はあなたの暮らしはどれにあたると思うか (Figure 16) については、「ふつう」が125名(44%),「やや苦しい」が57名(20%),「ややゆとりがある」が47名(16%),「大変ゆとりがある」が35名(12%),「大変苦しい」が20名(7%)の順であった。

### 2-2 経済的な困り感について

経済的な(お金に関して)ことであなたはどれくらい困っているか (Figure 17) については、「あまり困っていない」が82名(29%),「少し困っている」が80名(28%),「どちらともいえない」が70名(25%),「全然困っていない」が35名(12%),「とても困っている」が17名(6%)の順であった。

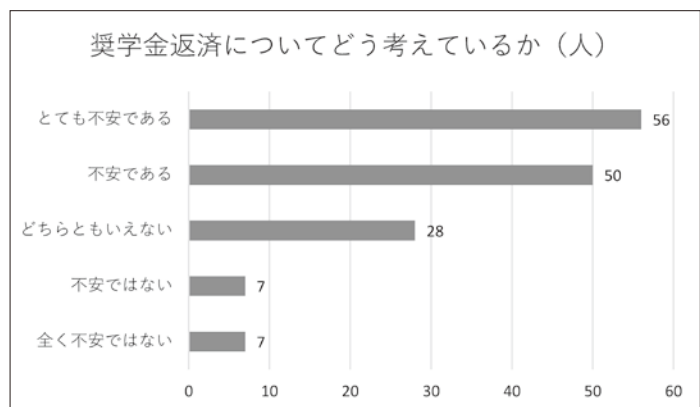


Figure 15 奨学金返済についてどう考えているか

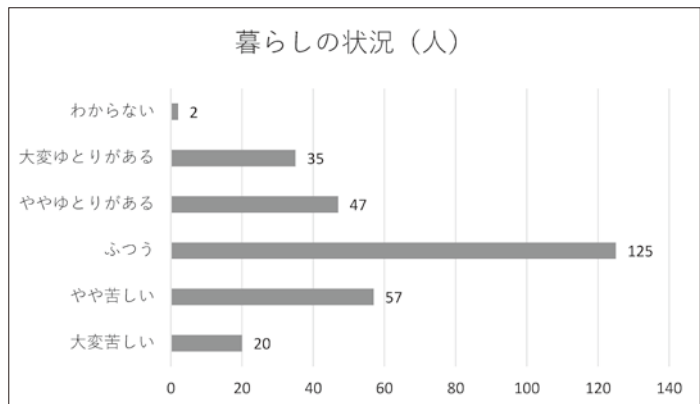


Figure 16 暮らしの状況

## 3. 自尊感情尺度(短縮版)について

自尊感情尺度5項目と合計の平均と標準偏差は, Table 1のとおりである。尺度の $\alpha$ 係数は, .696であり低い値であった。

#### 4. レジリエンス尺度（短縮版）について

レジリエンス尺度7項目と合計の平均と標準偏差は、Table 2のとおりである。尺度の $\alpha$ 係数は.734であり、十分に高い値であると判断した。

#### 5. 経済的困り感と自尊心 情尺度との関連

経済的困り感と自尊感情尺

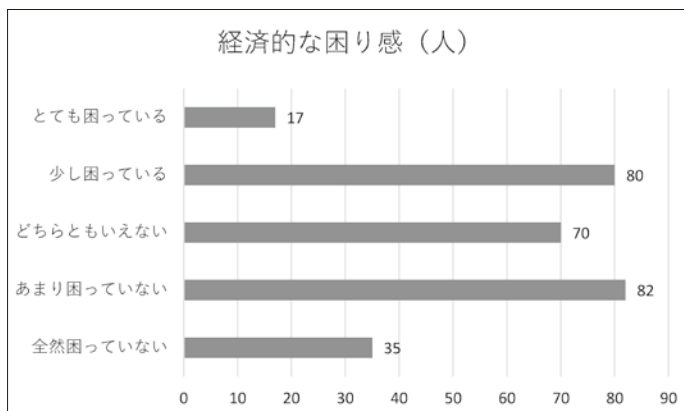


Figure 17 経済的な困り感

Table 1 自尊感情尺度の使用項目と基礎統計

	平均値(M)	SD
$(\alpha = .696)$		
1 少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.25	1.10
2 いろいろな良い素質もっている	3.10	1.11
3 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	2.86	1.12
4 だいたいにおいて、自分に満足している	2.93	1.15
5 物事を人並みには、うまくやれる	3.24	1.01
自尊感情尺度短縮版5項目合計	15.36	3.40

Table 2 レジリエンス尺度の使用項目と基礎統計

	平均値(M)	SD
$(\alpha = .734)$		
1 どんなことでも、たいてい何とかかなりそうな気がする	3.75	1.03
2 人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする	3.67	0.99
3 つらいことでも我慢できるほうだ	3.65	1.04
4 自分の性格についてよく理解している	3.68	0.91
5 自分から人と親しくなるのが得意だ	3.05	1.23
6 人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ	3.49	1.09
7 自分は粘り強い人間だと思う	3.13	1.09
レジリエンス尺度合計	24.41	4.61

Table 3 経済的困り感と自尊感情尺度項目との相関

4 だいたいにおいて、自分に満足している	-.19**
3 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	.16**
5 物事を人並みには、うまくやれる	-.15*
1 少なくとも人並みには、価値のある人間である	-.14*
2 いろいろな良い素質もっている	-.13*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$



Table 4 経済的困り感とレジリエンス尺度項目との相関

1	どんなことでも、たいてい何とかなりそうな気がする	-0.11
2	人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする	-0.09
3	つらいことでも我慢できるほうだ	-0.10
4	自分の性格についてよく理解している	-0.06
5	自分から人と親しくなるのが得意だ	-0.09
6	人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ	-0.04
7	自分は粘り強い人間だと思う	-0.10

Table 5 経済的困り感の高群と低群の「自尊感情尺度」得点「レジリエンス尺度」得点の平均値 (M)、SDおよびt検定結果

	経済的困り感低群		経済的困り感高群		差の検定		
	平均値 (M)	SD	平均値 (M)	SD	t値		
自尊感情尺度短縮版 (5項目)							
1	少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.44	1.02	3.08	1.21	2.34	*
2	いろいろな良い素質をもっている	3.29	1.06	2.96	1.20	2.17	*
3	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	2.67	1.15	3.03	1.10	-2.31	*
4	だいたいにおいて、自分に満足している	3.22	1.10	2.68	1.24	3.39	**
5	物事を人並みには、うまくやれる	3.47	0.95	3.13	1.12	2.33	*
自尊感情尺度短縮版 (5項目) 合計		16.10	3.12	14.86	3.77	2.63	**
レジリエンス尺度短縮版 (7項目)							
1	どんなことでも、たいてい何とかなりそうな気がする	3.90	1.00	3.64	1.07	1.81	n.s.
2	人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする	3.83	0.99	3.67	1.05	1.12	n.s.
3	つらいことでも我慢できるほうだ	3.78	0.95	3.61	1.12	1.19	n.s.
4	自分の性格についてよく理解している	3.78	0.99	3.64	0.84	1.14	n.s.
5	自分から人と親しくなるのが得意だ	3.20	1.25	2.99	1.27	1.19	n.s.
6	人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ	3.60	1.06	3.54	1.16	0.40	n.s.
7	自分は粘り強い人間だと思う	3.33	1.09	3.06	1.09	1.75	n.s.
レジリエンス尺度短縮版 (7項目) 合計		25.41	4.57	24.15	4.37	2.04	*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

度 (短縮版) 5項目の間には、いずれも弱い相関関係であることが示された (Table 3)。

経済的困り感と「3 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う ( $r = .16, p < .01$ )」との間には弱い正の相関、経済的困り感と「4 だいたいにおいて、自分に満足している ( $r = -.19, p < .01$ )」「5 物事を人並みには、うまくやれる ( $r = -.14, p < .05$ )」「1 少なくとも人並みには、価値のある人間である ( $r = -.14, p < .05$ )」「2 いろいろな良い素質をもっている ( $r = -.13, p < .05$ )」の4項目との間には、

弱い負の相関が示された。つまり、経済的困り感が強い学生は自尊感情も低い傾向であることがわかった。

## 6. 経済的困り感とレジリエンス尺度との関連

経済的困り感とレジリエンス尺度短縮版 (7項目)の間には有意な相関が認められなかった ( $r_s > -.11, ns$ ; Table 4)。つまり、経済的困り感とレジリエンスの関連はみられなかった。



## 7. 経済的困り感高群低群による自尊感情尺度、レジリエンス尺度得点（平均値）の差の検定

経済的困り感（Figure 17）については、「全然困っていない」「あまり困っていない」と回答した者を経済的困り感低群（以下「低群」とする）、「少し困っている」「とても困っている」と回答した者を経済的困り感高群（以下「高群」とする）とし、2群の間で、自尊感情尺度の5項目及び合計得点と、レジリエンス尺度7項目および合計得点の平均値に有意な差があるかどうかを確認するためにt検定を行った（Table 5）。

自尊感情尺度においては、5項目及び合計得点すべてにおいて、高群低群の2群の間で有意な差がみられた。

一方、レジリエンス尺度においては、合計得点のみ、高群低群の2群の間で有意な差がみられた。

## IV. 考 察

### 1. 大学生の1ヶ月の経済的収入から考える大学生生活の現状

大学生の仕送り（小遣いを含む）の結果（Figure 5）からは、対象者の55%が「0円」である。このことから、厳しい生活状況を強いられているといえる。「1～2万円台」の19%を合わせても、全体の70%以上が1か月で2万円以下の仕送り（小遣い）であり、奨学金やアルバイトに依拠していることがうかがえる。

また、奨学金に関しては、対象者の半数が受給を受けていることが示されたとともに、「大学生になって初めて借りている」と回答

した者が145名（49%）と、大学進学において奨学金が必要と判断した学生及びその保護者が全体の半数近く存在するということである。利用しなくても大学生生活が営める学生とそうでない学生の二極化であることが示唆された。

その中でも、奨学金の利用に関しては、学生の親（保護者）の存在が大きい。本調査からも、奨学金の利用を決心したきっかけ（Figure 11）については、「親から奨学金を借りるように言われた」が110名（73%）、大学での奨学金を利用するときに、相談した主な人は誰か（Figure 12）については、「親や家族」が125名（90%）、自分の手で受け取った奨学金の残金（Figure 13）については、「親が管理しているので、親に任せている」が59名（41%）、「実家に送っている、または実家で使っている」が16名（11%）と、奨学金利用と親の存在とは深い関連がある。

ちなみに、吉中（2016）が「学生にとって大学進学は子ども期からの扶養関係の延長としてあるといえる。学生や親自身の意識もそこにある。そのため、奨学金の所有管理については、曖昧さを生んでしまっている。」と指摘するように、奨学金が大学生生活を営むこと以外に使用されている可能性が示唆され、またその背景には学生の家族を含む生活の困窮の問題が潜んでいることがうかがえよう。

奨学金をどのように返済しようと考えているか（Figure 14）については、「自分で全額返済予定」が118名（80%）、奨学金を返済することについてどう思っているか（Figure 15）については、「とても不安である」が56名（38%）、「不安である」が50名（34%）であり、この両者を合わせると72%にものぼる。

将来、奨学金を学生本人のみで返済していくことに不安を感じながら大学生活を過ごしていることが示唆される。

アルバイト経験(Figure 8)については、「現在している」が212名(73%)、「今はしていないが、大学生になってしたことはある」が52名(18%)と、9割の学生が大学生でアルバイトを経験していることがわかった。アルバイト収入の使い道(Figure 9)については、総じて「娯楽費」「交際費」「生活費」である。なお、学生の約25%が1か月に7万円以上のアルバイト収入があることから、単純には計算できないものの、7万円のアルバイト収入について時給900円とすると、1か月に約78時間、1週間に約20時間弱稼働していることになる。

高本・古村(2018)によると、「アルバイト就労による授業等の欠席および期末試験期間中のアルバイト就労が就学困難に対するリスク要因となる。(中略)深夜勤務における睡眠不足や疲労の蓄積が大学への出席に支障を来すことで修学困難に至る」と指摘している。アルバイト就労における大学生活の維持・充実を図るものであると同時に、多くのリスク要因を抱えることにもつながるであろう。

## 2. 大学生の経済的な困り感と自尊感情尺度及びレジリエンス尺度との関連について

自尊感情の定義について、遠藤(2013)は「自分自身に対する全体的評価感情の肯定性、すなわち自分自身を基本的に良い人間、価値ある存在だと感じている点」を用いるなら、経済的困り感によって、「良い人間、価値ある存在」だと思っていないことがうかがえた。すなわち、本調査結果(Table 3)からは経済的

に困窮していると認識していることが自尊感情に影響を及ぼすことが示唆された。

レジリエンスについては、「心理的な傷つきから立ち直る回復力(平野, 2010)」を指すものであるが、経済的困り感とレジリエンス尺度7項目の間には、相関が認められなかった(Table 4)。このことから、経済的に困窮しているという認識と心理的な傷つきから立ち直る回復力であるレジリエンスとの関連性は低いと考えられる。

しかし、*t*検定の結果(Table 5)では、自尊感情尺度においては、5項目及び合計得点すべてにおいて、高群低群の2群の間で差がみられ、経済的に困窮していると認識している高群の方が、経済的に困窮していると認識していない低群よりも有意に低かった。

また、レジリエンス尺度においても、合計得点のみではあるが、高群低群の2群の間に差がみられた。経済的に困窮していると認識している高群のほうが、経済的に困窮していると認識していない低群よりも有意に低かった。

この結果からは、困窮していると認識している高群のほうが低群よりも、自尊感情及びレジリエンスが低く、困窮しているという認知が、これらに何らかの影響を与えると示唆された。

このことについて、「日本心理学会の公開シンポジウム『貧困社会を考える：心理学は何かできるのか』」参加レポート(広瀬, 2017)における加藤報告の中で、「貧困の認知」に着目し、生活が苦しいと答えた子ども、つまり貧困を認知した子どもには家庭の収入が低いだけでは見られなかった抑うつが高くなるという傾向や、学校生活にかかわる指標についてもより広い年齢と項目においてネガティブ

な影響を与える可能性がみられると指摘されている。そして、「収入の格差に対する対応ももちろん大切であるが、貧しいながらそれと一生懸命に楽しく周囲の人と付き合いながら生活している世帯も数多く存在していることから、収入格差があっても嫌な思いをしなくてもいい社会づくりをしていくことが大切ではないか」と報告中で指摘されている点に本研究の結果はつながると考えられる。

## V. おわりに

本研究からは、①大学生の経済状況が厳しい現状であることと、②経済的な困り感と自尊感情との間には少なからず関連があるということ、また経済的に困窮していると認識している群（経済的困り感高群）のほうが、経済的に困窮していると認識していない群（経済的困り感低群）よりも、自尊感情得点およびレジリエンス得点が有意に低いことを示してきた。

貧困の問題については確かに喫緊の課題ではあるが、経済状況のみが影響を及ぼすとは言いきれないことを本調査でわずかではあるが明らかにできたと考える。

このことについて、内田（2017）は「学力と家庭の所得は確かに相関があります。しかしあくまでも単純相関であり、因果関係を意味しているわけではありません」とし、「子どもの学力格差の原因は経済格差ではなく大人の養育や保育の仕方が媒介要因である」と結論づけている。

単純に、経済状況の悪化が問題とされるのではなく、経済状況の悪化による周囲のかかわりや、本人自身の貧困の受け止めに深刻化

しすぎないで済むような社会環境の醸成が求められるといえよう。

今後の課題としては、経済的困り感と自尊感情及びレジリエンスについて、相関分析と $t$ 検定のみでの分析であったことから、より詳細に分析をしていく必要がある。また、送り・アルバイト・奨学金と自尊感情やレジリエンスとの関連についても触れることができなかった。なお、大学生生活と経済状況の間には、自尊感情やレジリエンス以外にもさまざまな媒介要因が考えられるため、それらについても検討していきたい。

## 謝 辞

本研究の作成にあたり、北海道大学大学院教育学院博士後期課程の水野君平氏にはデータの解析についてご示唆いただきました。また北翔大学心理カウンセリング学科3年次飯田ゼミの佐々木美輝氏をはじめとする皆様には図の作成などでご協力いただきました。感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 阿部彩：子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える，岩波新書，2014.
- 2) 遠藤由美：自尊感情 藤永保監修『最新心理学辞典』，平凡社，287-290，2013.
- 3) 平野真理：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み－二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成，パーソナリティ研究19-2，94-106，2010.
- 4) 飯田昭人・瀧澤颯大・水野君平・加藤弘通：子どもの貧困における保育者および教

- 職員の意識調査（第1報）－貧困状況下の  
子どもの状態や子どもの困難の捉え方につ  
いて－, 北翔大学教育文化学部紀要4, 1-18,  
2019.
- 5) 広瀬拓海：日本心理学会の公開シンポジ  
ウム「貧困社会を考える：心理学は何がで  
きるのか」参加レポートより, 2017.  
[https://psych.or.jp/event/sympo2017\\_  
hinkon\\_report/](https://psych.or.jp/event/sympo2017_hinkon_report/)【閲覧日：2019年1月1日】
- 6) 加藤弘通・水野君平：札幌市の小学生・  
中学生の生活と意識についての調査I：学  
校・家庭・自己および居場所に注目して,  
子ども発達臨床研究11, 1-10, 2018.
- 7) 加藤弘通・太田正義・松下真美子・三井  
由里：思春期になぜ自尊感情は下がるの  
か？－批判的思考態度との関連から－, 青  
年心理学研究30(1), 25-40, 2018.
- 8) 内閣府 子供の大学等進学率について  
第4回 子供の貧困対策に関する有識者会議  
における「子供の貧困対策指標」  
[https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/  
yuushikisya/k\\_4/pdf/sl.pdf](https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/yaushikisya/k_4/pdf/sl.pdf)  
【閲覧日：2019年1月1日】
- 9) Rosenberg, M.: Society and the  
adolescent self-image. Princeton, N. J :  
Princeton University Press. 1965.
- 10) 末富芳：第1章子どもの貧困対策と教育  
支援 末富編『子どもの貧困対策と教育支  
援－より良い政策・連携・協働のために』,  
明石書店, 19-38, 2017.
- 11) 高本真寛・古村健太郎：大学生における  
アルバイト就労と精神的健康および修学と  
の関連, 教育心理学研究66(1), 14-27, 2018.
- 12) 内田伸子：子どもの貧困は超えられる－  
学力格差は経済格差を反映するか？, 発達  
151 (Vol.38), ミネルヴァ書房, 31-36, 2017.
- 13) 吉中季子：奨学金制度の利用からみる大  
学生生活の実態と課題－地方大学における学  
生アンケートからの考察－, 名寄市立大学  
紀要10, 47-58, 2016.